

ハンナのかばん

脚本
いずみ凜

登場人物

父ジョージ (現在のジョージ)

ララ・ハンナ (ジョージの娘)

ハンナ (ジョージの妹)

ジョージ (少年時代のジョージ)

マルケータ (ハンナとジョージの母)

カレル (ハンナとジョージの父)

史子 (エバもやる)

ナチスの兵士

人びと

五人の役者を中心にしてやる場合は次のように役を兼ねる

父ジョージ — カレル

ララ・ハンナ — ハンナ

ジョージ

マルケータ

史子 — エバ

◆シーン1

舞台正面にスクリーン。舞台前にはいくつもの古い革のかばんが積みあがっている。
同じ役者が役を兼ねる場合もある。象徴的なものを身につけることによって、例えばハンナであるのか、ララ・ハンナであるのかがわかるようにしてもいい。
舞台上にはほかに公園の遊具のようなもの、ジャングルジムのようなフェンスや鉄棒などがあるかもしれない。
開演時間になると、静かに暗くなっていく。
明るくなると、舞台には史子。
別の場所に史子からの手紙を手にした父ジョージ。

史子 二〇〇〇年八月二十二日 ジョージ・ブレイデイ様、突然の手紙に驚いていらっしやることと思います。わたしは東京でホロコースト教育資料センターの所長をしている石岡史子（いしおかふみこ）といいます。実は今、うちのセンターで展示しているかばんがあなたの妹ハンナ・ブレイデイさんのだとわかったのです。つらい思い出に触れることをどうかお許しください。ただ、あなたがハンナと過ごした幸せな日々のことを、ハンナとどんなことを語り合い、どんな夢を見ていたのかを、日本の子どもたちに教えていただきたいのです。あのかばんを持っていたハンナという女の子がいったいどんな子だったのかを。

◆シーン2

舞台スクリーンには、ホームに入ってくる古い貨車。貨車が止まると扉が開く。少女ハンナが自分の名前の書かれた革のかばんをもって現れる。史子をみつけると、ハンナは自分のかばんを史子にさしだす。それを受けとる史子。ハンナはかばんを渡すと去っていく。

史子 待って、ねえ、待って！

ハンナのかばんを手にした史子、ハンナを探す史子の旅が始まる。

史子 （かばんに書いてある文字を読む）・・・ハンナ・ブレイデイ。

◆シーン3

スクリーンに今度は現代の電車が到着する。ここは東京のどこの駅。電車からは、かばんや新聞、携帯電話などを手にした出勤姿の人々などが忙しそうに降りてくる。発車のベルが鳴り、別の人々が電車の中に消えていく。

史子 このかばんが届いたとき、わたしも、そして子どもたちもいろんなことを想像しました。だって、かつて誰かがこのかばんを実際に使っていたんですから。そして、それはどこの誰かではなくて、ここにちゃんと名前が書かれてる、「ハンナ・ブレイディ」と。名前がはつきりわかると、確かにこの人はいたんだと実感できました。ハンナという女の子が、生きて、こうして、このかばんを持って歩いていた——そう思うと、ハンナがどんな子だったのか、わたしたちはどうしても知りたくなったのです。こうしてわたしたちのハンナを探す旅が始まりました。

史子、去る。

◆シーン4

二〇〇〇年、カナダ。
買ってもらったばかりのバッグを持っているララ・ハンナと父ジョージがやって来る。

父ジョージ 気に入ったのが見つかってよかったな。さあ、そのかばんに何をを入れる？

ララ・ハンナ おとうさんには言わないもん。

父ジョージ なんて？

ララ・ハンナ 秘密！

父ジョージ (苦笑いしつつ) ララ・ハンナもとうさんに秘密を持つような年になったか。

ララ・ハンナ もうすぐ十四歳だからね、悪いけど。

父ジョージ (笑って) 悪くないよ。十四歳か……

ララ・ハンナ 何？ どうかした？

父ジョージ 大きくなったなと思ってさ。

ララ・ハンナ そりゃ大きくなるよ、小さくはならないでしょう。

父ジョージ (笑いながら) そりやそうだけど、……いや (感慨深い)、十四歳なんてすごいよ。

ララ・ハンナ すごいって何が？

父ジョージ 十四歳になれたってことがさ。

ララ・ハンナ 十四歳になんて誰だってなれるでしょ。

父ジョージ (真顔で) いや、たいしたことだよ。

ララ・ハンナ そうかな。(バッグを見て) これもってどこに行こうかな。

父ジョージ なあ、ララ・ハンナ、そのかばんを持って、とうさんと日本に行かないか。

ララ・ハンナ 日本？

父ジョージ ああ。

ララ・ハンナ なんで日本に行くの？

父ジョージ 日本から手紙が来たんだ。

ララ・ハンナ 手紙？ 誰から？

父ジョージ フミコ・・・フミコ・イシオカ。

ララ・ハンナ おとうさんの知ってる人？

父ジョージ いいや、おとうさんも知らない

ララ・ハンナ じゃ、なんで？

父ジョージ ううむ……、どこから話そうか。(しばし考えて) おまえが生まれたときはとうさん、ほんとにうれしかった。初めての女の子だったからね。

ララ・ハンナ え？ わたしのこと？

父ジョージ ああ、もちろんお兄ちゃんたちが生まれたときもうれしかったけど、どうしても女の子がほしかったんだ。とうさんはね、いつか自分に娘が生まれたらハンナと名づけるんだって、ずーっと前から決めてたんだ。

ララ・ハンナ ずーっと前から？

父ジョージ そう、ずーっと前から。

ララ・ハンナ それでわたしはララ・ハンナ……。

父ジョージ (うなづいて) ハンナというのはとうさんの三つ違いの妹の名前なんだ。

ララ・ハンナ 聞いたことあるけど、よく知らない。だって、おとうさん、そういうこと、ちゃんと話してくれないんだもん。

父ジョージ ……。話せなかったんだ、とても話す気になれなかった。でも、きょうはちゃんと話す。

ララ・ハンナ (なんだかわからないが、何かを感じとって) うん。

父ジョージ おまえももうすぐ十四歳になることだしな。ハンナはとうさんの大事な大事な妹さ。ほんとうはおまえにもハンナって名前をそのままつけたかったんだ。でも、かあさんが反対してね。

ララ・ハンナ おかあさんが？ どうして？

父ジョージ 同じ名前をつけるとその人の運命まで引き継ぐことになるって、かあさんは絶対に承知しなかった。

ララ・ハンナ 運命まで引き継ぐことになる……、どういうこと？ 何があったの？

父ジョージ こどもの頃、とうさんたちはチェコスロバキアのノブ・メストって町に住んでたんだ。うちは雑貨屋さんでね、その頃の雑貨屋さんは今のスーパーマーケットみたいなもんだからね、近所の人たちがしよっちゅう買い物に来て、おとうさんもおかあさんも大忙しだった。お店が休みになる日曜日が待ちどおしくてね、朝目が覚めるとふたりともすぐにおとうさんとおかあさんのベッドに飛び込んだ。ベッドの中でみんなでごろごろして、ゆっくり起きると、ピクニックやドライブに出かけるんだ。

母親のマルケータが浮かびあがる。

マルケータ ジョージ、ハンナ！ さあ、でかけるわよ！ ジョージ、髪はといたの？ ほら、ハンナも前髪をあげて。

ララ・ハンナ おとうさん？

父ジョージ (ララ・ハンナの前髪をかきあげて) 妹のハンナは、いつもこんなふうの前髪をあげてた。

ララ・ハンナ (前髪をピンで留める、もしくはカチューシャをするなどしながら) わたしにハンナって名前をつけたいと思うなんて、よっぽど妹思いのお兄さんだったんだね。

父ジョージ (含みのある笑いで) まあね。(思い出しながら) ハンナはクリームパイが大好物だった。クリームパイが好きなのはハンナだけじゃなかったけどね。

父ジョージとは別の役者が少年時代のジョージとなって、歌いながら入ってくる。

ジョージは隠し持っていたクリームパイを一口ほおぼる。
ララ・ハンナは持っていたかばんを置くと、ハンナに変

わる。例えば、ララ・ハンナの時には必ずそのかばんを
持っている、ハンナのときは前髪をピンで止めるかカチ
ューシャをしているなどと区別できるといい。

ハンナ お兄ちゃん、返して！（兄を追いかけてきて）それ、わたしのクリ
ームパイ！ 食べちゃダメ！

ジョージ わかったよ、ほら、食べさせてやるから。ハンナ、あーん。

ハンナ（口をあけて、パイを一口ほおばり、おいしさに満足してにっこり）
おいしい。

ジョージ どれどれ？（すかさず自分も一口かじる）

ハンナ おにいちゃん、ずるい！ 返して！

父ジョージ こんな具合で、わたしは別に妹思いの優しい兄さんだったわけ
じゃない。どんな兄妹でもする、ごくごくくだらないけんかをしょっ
ちゆうしてた。

ジョージ わかった、ハンナ、返すよ、返すから。

と、いいつつ逃げる。それを追うハンナ。

ハンナ あ！ また食べた！ お兄ちゃん！！

ジョージ はいはい。でも、そんな大きいのも、ひとりで食べると、おなか壊
すぞ。

ハンナ いいもん！

父ジョージ たくさんけんかをしてたくさん遊んだ。近所の友だちがいつも
一緒だった。

近所の子どもたちが出てくる。

ジョージ かくれんぼしよう。

ハンナ じゃあ、ハンナがオニね。

目を閉じて数を数えるハンナ。ジョージを含めて近所の
子どもたちが会場のあちこちに隠れる。その中にはハン
ナの親友マリアもいる。ハンナは数え終わるとはりきつ

て探し始める。隠れた子を見つけては、大きな声で「見つけた！」と得意になるハンナ。マリアを見つけたときは、「マリア、見つけた！」と特にうれしそう。だが最後まで見つからない兄ジョージ。なかなか見つからないが結局は見つかる、などなど。楽しいかくれんぼ。やがて父ジョージがジョージにボールをほおりなげる。ジョージはそのボールを受け取ると、みんなでボール遊びが始まる。『晴れた日には』を歌いながら。

♪ 晴れた日には

おひさま ごきげん でかけよ
約束なんてしなくても
いつのまにか きっと 誰か やってくるのさ
一緒に 走りまわろうよ

おひさま ごきげん でかけよ
約束なんてしなくても
いつのまにか きっと きみに めぐりあうのさ
一緒に 笑いころげよう

みんなで飛びきり楽しく遊んでいる。
が、日常を突き破るように突然サイレンが鳴りだし、戦争の始まりを告げる。

父ジョージ ある時、隣の国のナチス・ドイツの軍隊がわたしたちの住んでいるチェコスロバキアに攻め込んできたんだ。わたしが十一歳、ハンナが八歳のときだった。

声 ソフィ、帰ってらっしゃい。早く。ソフィ。

子どもたちは呼ばれるとそれぞれ帰っていく。

ハンナ ソフィ？ あ、ねえ。ねえ、ちょっと待って。

ひとり、またひとりと去っていく。

マリアは最後までハンナと手をつないでいるが、やがて

声 マリア、帰ってらっしゃい。早く！ マリア！

マリアが手をほどく。

ハンナ マリア？

マリアは悲しそうな顔でハンナから離れると、走り去る。

ハンナ マリア！ マリア！

ジョージとハンナのふたりだけが残される。

◆シーン5

戦渦の中、ジョージとハンナも逃げようとする。

しかしふたりの前にフェンスが現れるとつぎつぎ行く手を阻む。行き場を失ったふたりに、あちこちから言葉が投げつけられる。「ユダヤ人は決められた時間にしか外出してはいけない。」「ユダヤ人は決められた店でしか買い物してはいけない。」「ユダヤ人は旅行してはいけない。」「ユダヤ人は財産をすべてナチスに報告しなければならぬ。」「ユダヤ人は悪い事をたくらんでいる！」「危険だ！」投げつけられる言葉に追い詰められて後ずさるふたり、おびえるハンナ、ハンナをかばうジョージ。その間、舞台には有刺鉄線が張り巡らされていく。やがて言葉は消え、舞台にはハンナとジョージのみ。

ハンナ どうして？ ねえ、おにいちゃん、どうして？ わたしたち、みんなと何が違うの？ この国で生まれてこの国で育って、みんなとなんにも変わらないじゃない。

ジョージ ああ。でもね、ハンナ、ぼくらはユダヤ人なんだ。この町でユダヤ人の子どもはぼくらふたりだけだからね。

母親のマルケータと父親のカレルが出てくる。(5人でやる場合、父ジョージがカレルとなって出てくる)

マルケータ ジョージ、ハンナ。

ジョージ おかあさん、

ハンナ おとうさん！

マルケータ さあ、うちに戻りましょう、外は危ないわ。

ハンナ わたし、ユダヤ人なんかいやだ。

カレル ハンナ、いやだといっても、うちはユダヤ人の家系なんだから

ハンナ じゃあ、出てく、うちを出てくもん。(とかばんを持ち出す)

カレル ハンナ……

ハンナ 学校にも行けないし、誰も遊びに来てくれない。なんで？ 前はみ

んな一緒に遊んでた、わたしがユダヤ人だつてこと気にする人なんて

いなかったのに。マリアはね、どんなことがあつてもずっと一緒にだつ

て約束してくれたの、いつまでも親友だつて。なのに、マリアまで……

マルケータ ハンナ、マリアのせいじゃないわ。ユダヤ人と一緒にいると、

マリアもマリアの家族もナチス・ドイツに罰せられることになるかも

しれないの。だから仕方ないのよ。

ハンナ 仕方ない……？

ジョージ (苛立ちをぶちまける) 何もかも禁止、禁止、禁止！ ユダヤ人

だからって、なんでこんな目にあわなきゃいけないの。

ハンナ ユダヤ人って何？ 病気か何か？ ユダヤ人はうつるの？ だか

ら外にも出られないの？ ねえ、何が悪いの？ 何でだめなの？

マルケータ 何が悪いのでもだめなのでもない。ユダヤ人だから、それだけ

よ。

ハンナ・ジョージ ……。

ハンナ ナチス・ドイツはなんでこんなことするの。わたしたち、何にもし

てないのに。(くやしくて涙が出る)

マルケータ ……。ホント、まるでいじめっ子みたいだね。でも、(明るく

元気よく) しょんぼりしてたつてどうしようもないでしょ。それじゃ

ナチスの思う壺よ。遊びなさい、ふたりで遊ぶの。

顔を見合わせるハンナとジョージ。

マルケータ (ハンナの涙を拭きながら) おかあさん、ハンナの涙なんか拭

きたくないんだけどな。汗なら拭いてあげたい、思いっきり遊んで笑

いながら走ってきたハンナの鼻の頭の汗！

ハンナ 鼻の頭の汗……？ わたし、鼻の頭に汗なんてかく？

マルケータ (いたずらっぽく笑つてうなづく)

ハンナ ほんと！？ ねえ、お兄ちゃん、ホント？

ジョージ うん、ときどきな。

ハンナ えー!!

マルケータ おかあさんは大好き、ハンナは鼻の頭の汗までかわいい！ほら、うちにはこんな広い庭があるじゃない。そうだ！ 地下の倉庫と屋根裏部屋でも遊んでいいことにする。

ジョージ え、いいの、おとうさん？

カレル ああ、特別にな。探検するとおもしろいぞ。

マルケータ でも、お店の売り物もあるんだから絶対に壊さないでよ。

カレル それから、ちゃんと元に戻しておくこと、いいな。よし、ジョージ、ハンナ、地下の倉庫を探検だ！

マルケータ 兄妹がいてほんによかったね。(とふたりの肩を抱くと、ジョージに) ジョージお兄ちゃん、よろしくね。

マルケータ、カレル、入っていく。やがて、

ジョージ よーし、ハンナ、地下の倉庫で探検だ！

ハンナ うん。

と、そこは地下の倉庫。雑貨屋の商品がいろいろ置いてあるのだろう。ジョージがその品物を使つては、ハンナに面白いことをしてみせる。例えば、たわしを鼻の下に当てて「ひげ！」など、できるだけばかしく楽しいことを。そのうちハンナは古いオルゴールを見つけ始める。オルゴールのねじを巻き、ふたを開ける。オルゴールの音が響く。オルゴールを見つめるハンナ、やがて

ハンナ ねえ、おにいちゃん、この間、うちに来た人がいつてたこと、ほんとかなあ。

ジョージ なんのこと？

ハンナ お隣のドイツでは、ユダヤ人の家やお店が壊されたり、火をつけられたって……。いつかうちも……

ジョージ そんなことない、あるわけないよ！
ハンナ でもあの人、「ここいらもそのうちたいへんなことになる」って言うってたよね。

ジョージ だいじょうぶさ、おとうさんもおかあさんもついで。

ハンナ うん……、そうだね。

ジョージ (任せるといわんばかりに) お兄ちゃんもついてるだろ。

ハンナ (少し笑って) うん、そうだね。

ジョージ こら、何で笑うんだよ。

ハンナ へへ

ジョージ よし、ハンナ、今度はかくれんぼだ。

ハンナ うん。

ジョージ じゃあ、お兄ちゃんがオニやってやるから、ハンナ、かくれるんだぞ。

ジョージが数を数えだすと、ハンナは一生懸命考えて隠れる。

ジョージ、数え終わるとすぐにハンナを見つけてるが、しばらくは知らないふりをして。

ジョージ (わざとらしく) ハンナ、どこだ? うーん、どこかなあ、どこだろう。(少し怖そうな声を出してみたりして) ハンナ、ふっふっふ、どこだ? 見つけてやる、見つけてやるぞ、(と冗談めかして言葉で追い詰める) そんなところに隠れてもお兄ちゃんにはお見通しだ! ハンナ あー! 見つかっちゃった。じゃあ、今度はハンナがオニね。(数を数えだす)

ジョージが隠れる。ハンナは数え終わって探すのだが、なかなか見つからない。最初のうちは「ここかな?」「お兄ちゃん!」などと、楽しそうに探しているが、やがて不安に駆られてくる。

ハンナ おにいちゃん? どこ? おにいちゃん!

返事はない。

靴音がだんだん近づいてくる。

ハンナ (兄ではない何かの存在におびえる) 誰……?

怖くなって振り返るハンナ。足音が消える。誰もいない。やがて、またどこからか足音が近づいてくる。ハンナ、また別の方向を振り返る。足音は消え、そこには誰もい

ない。「ユダヤ人はどこだ?」「ユダヤ人を探せ」「ユダヤ人をつかまえろ」というささやき声があちこちから湧きあがり、ハンナを取り囲む。

ハンナ 誰? 誰なの? …おにいちゃん、…おにいちゃん、おにいちゃん!! (叫ぶ)

あわてて出てくるジョージ。

ジョージ ハンナ、どうしたの? ほら、ここにいるよ。ちゃんというから。ハンナ おにいちゃん。(と兄が見つかった安心感ですがりがつくが、やがて) もういやだ…、こんなのいやだ!

ジョージ ハンナ…、

どうすることもできないジョージ。が、何かを思いつく。

ジョージ いいこと思いついた、ハンナ、待ってて。(と、立ち去る)

ハンナ、ジョージが去るのを見送ると、ひとりで何かをかみ締める。

やがて、紙とペン、ガラスの空き瓶を持ったジョージが戻ってくる。

ジョージ (ペンと紙を差し出して) ほら、ここに書くんのだ。

ハンナ 何を?

ジョージ 今、おまえがいやだと思ってること、みんな書き出すんだ。

ハンナ ばかみたい。そんなことしたって何にもならない。公園で遊べるよ
うになるわけでもないし、マリアだって、みんなだって遊びに来てくれるわけじゃ…

と、話しながら、それは次第に歌になっていく。ジョージは歌いながらハンナと自分の言葉を紙に書き込む。

♪ ないないだらけ

ジョージ ねえ、さびしいことはなに?

ハンナ (仕方なくつぶやくように) マリアに会えないこと…

ジョージ ほかにはなあに？ 言ってごらん
ハンナ 誰も遊びに来ない

ジョージ それから？

ハンナ 遊びにも行けないし

ジョージ 学校にも行けない

ハンナ 隣町にも行けないから、

ジョージ・ハンナ おばあちゃんにも会えない

ハンナ (台詞) おばあちゃん、どうしてるかな。

ジョージ ラジオも取り上げられて

ハンナ 歌も聞けない

ジョージ ニュースも聞けない

ハンナ ケーキ屋さんにもいけないから、

ハンナ・ジョージ クリームパイも食べられない

ハンナ (叫ぶ) ああ、クリームパイ！

ジョージ じゃあ、くやしいことはなあに？

ハンナ 「ユダヤ人お断り」

ジョージ・ハンナ 張り紙だらけ

映画館の入り口

スキー場

スケート場も

公園も入れない

ユダヤ人だけ入れないの

誰がどうして決めたの

自由を取り上げられて

今が見えない

明日も見えない

わからないことだらけだから

聞き分けよくなんてなれない

(叫ぶ) なれるもんか！

ジョージ (たくさん書かれた紙を見ながらうんざりして) うわー、紙い

っぱいだ。よし、この紙をくるくるっと丸めて、この(ビンの)中に

つめるだろ。(とつめながら) コルクで栓をして、できあがり！

ハンナ どうするの、それ？

ジョージ 埋めちゃうんだ！ 悔しいことも悲しいこともぜーんぶ埋めち

やえ！

ハンナ 埋めちやえ！

ピンを持って走り去るふたり。

◆シーン6

史子がハンナのかばんを持ってまた歩いてくる。

史子 ハンナ・ブレイデイ、一九三二年五月十六日生まれ、孤児。(かばんに書かれた文字を見せながら) かばんにはこう書かれています。ハンナのことが何かわからないか、わたしは世界中の大きな博物館に手紙を書いてたずねてみました。でも、なかなか返事はありません。だけど、きつとこの世界のどこかにはハンナが残した手がかりがあるはずですよ。きつとわかる、五月十六日生まれの子、ハンナ・ブレイデイのことが。

史子、去っていく。

目隠しをしたハンナがジョージに連れられてやってくる。
カレルとマルケータがケーキのつた大皿を持って現れる。

カレル・マルケータ ハンナ、お誕生日、おめでとう！

カレル おかあさんがつくってくれたぞー。(とケーキを持って)

マルケータ ほーら、ハンナ！

ハンナ わあ、ケーキだ！

ジョージ うまそう〜！

カレル いつもみたいに友達は呼べないけど、きょうは家族みんなでハンナの誕生日を祝おうな。おめでとう、ハンナ！

マルケータ・ジョージ (口々に) おめでとう、ハンナ！

ハンナ どうもありがとう！

カレル ハンナは大きくなったら、なんになるんだい？

ハンナ わたし？ 学校の先生になる。先生になって、子どもたちにたくさ

ん歌を教えるの。みんなと一緒にいろんな国のいろんな歌を歌うんだ。

カレル そうか、ハンナは先生になるのか。よし、じゃあ、みんな心の中で

願い事をとなえよう！

それぞれが願い事をする。

ハンナ　じゃあ、みなさん、わたしについてきてください！
ジョージ　お、ハンナ先生だな。

と、家族みんなで歌い、おどりだす。
楽しい家族の時間

ハンナ　ねえ、おかあさん、ケーキ食べようよ。

ハンナとジョージはマルケータとケーキを食べる。
それをじっと見つめるカレルは、父ジョージにもどり、

父ジョージ　外の世界にはいけない、わたしたちの世界はこの家の中だけだった。わたしたち家族はこうしてことあるごとに歌を歌い……

ドアをたたくノックの音。

父ジョージ　そんなときだ。おかあさんあてに一通の手紙が届いた。
カレル　(カレルとなって手紙を差し出す)　マルケータ。

マルケータ　どうしたの？　何？　(と近寄って、封筒を手にすると表書きを見て)　わたしに？

手紙を読むマルケータ。

マルケータ　……。

カレル　すっかり遅くなっちゃったな。さあ、ふたりとも着替えて、おやすみの用意をしなさい。

ジョージ・ハンナ　えー！

カレル　(きつぱりと)　行くんだ、さあ。

ジョージ・ハンナ　……はい。おやすみなさい。(と去る)

カレル・マルケータ　おやすみ。

カレル　(手紙を見て)　「明日の朝9時までにナチスの秘密警察本部に出頭せよ」……、とうとう来たか。

マルケータ　ナチスの秘密警察本部から、いったいどこへ連れて行かれるのかしら。

カレル 誰にもわからん。だが、行かなければ何をされるかわからない。マルケータ……、

マルケータ 明日の朝9時までに着こうと思ったら、明け方には家をでない
と……。すぐに支度しなくちゃ。

カレル ……マルケータ……。

マルケータ (お互いの心を支えあうように抱き合うと) 旅行かばんを出しておいてくれる？ 子どもたちに話してくる。

◆シーン7

マルケータ、ジョージとハンナの寝室に。

マルケータ ジョージ、ハンナ、しばらくのあいだ、おかあさんは遠くに行く
かなくちやいけないの。

ジョージ 遠く？ ……遠くってどこ？

ハンナ いつまで？

マルケータ 今はまだわからない。落ち着いたら手紙を出すわ。

ジョージ・ハンナ ……

マルケータ そんな顔しないで、だいじょうぶ、おとうさんがいるから。おかあさんがるすのあいだ、ふたりともいい子にしてよ。(ふたりの髪をなでながら) おとうさんの言うこと、ちゃんと聞いてね。いい？ ふたりが眠るまで今夜はここにいますから。

ハンナ じゃ、わたし、眠らない、ずっと起きてる。

マルケータ ハンナ……。さあ、ふたりとも眠りなさい。ほら、目を閉じて。

マルケータ、こもりうたを歌いだす。

♪マルケータのこもりうた

星がまたたき

上のまぶたと下のまぶだが そつとキスする

星よ ふれふれ ふりそぞげ

月明かり この子たちを包んで

さびしくないように 悲しくないように

明日はきつと いいことが いいことがあるから

その歌の中で、眠っていくジョージとハンナ。マルケー

タ、眠っているジョージとハンナにそつとキスをする。カレルがかばんとコートを持って待っている。カレルがマルケータの肩にコートをかける。かばんを持つマルケータ。見送るカレル。こもりうたはやがてジョージとハンナ以外の役者の静かな合唱となる。

◆シーン 8

朝日。

舞台には父ジョージ。

父ジョージ あの日、明け方おかあさんがキスをしてくれたことはおぼえてるんだ。なんであのとき、起きあがらなかったんだろう。起きあがってちゃんとさよならを言えばよかった……。まさかそれきりもう会えなくなるなんて思ってもみなかったんだ。

目を覚ますジョージとハンナ。辺りを見回すと、ふたり、顔を見合わせる。

ハンナとジョージは家の中を探す。

ハンナ・ジョージ おかあさん！ おかあさん！ おかあさん！（呼びながら走り去る）

父ジョージ ナチスドイツはあちこちに収容所を作ってはそこにユダヤ人を集めていたんだ。いつ誰がよびだされるのかは誰にもわからなかった。それはある日突然やってくる。しばらくして、おかあさんはドイツの収容所にいるってことがわかった。「絶対に連れ戻す」、おとうさんはそういつてたけど、そんなことできっこなかった。

ララ・ハンナが出てくる。

ララ・ハンナ どうして？ おかあさんは帰ってこなかったの？

父ジョージ おかあさんに会ったのはそれが最後だ。

ララ・ハンナ そんな……、そのとき、おとうさん、いくつだったの。

父ジョージ 十三歳になったばかりだった。

ララ・ハンナ 十三歳……

◆シーン9

父ジョージ でも、ハンナの次の誕生日におかさんから手紙が届いたんだ。

収容所で労働をさせられているマルケータ。

父ジョージが手にした封筒から、手紙とパンで作ったハート型のお守りが出てくる。

父ジョージ (手紙を読み始める) ハンナ、お誕生日おめでとう。もう十歳になるんだね。今年と一緒に祝いできなくてごめんね。……

マルケータ (ひたすら働き続けながら) ハンナ、お誕生日おめでとう！もう十歳になるんだね。今年と一緒に祝いできなくてごめんね。このハートのお守りは、かあさんからのプレゼントです。

手紙を読みつづけることができなくなってしまふ父ジョージにそつとよりそうララ・ハンナ。ふたり、去っていく。

マルケータ パンを固めて作りました。このハートがハンナを守ってくれますように。しばらく会わないうちにきつと背も伸びてるね。洋服、きつくなってるない？ おとうさんとおにいちゃんから、おばさんに新しい服を作ってもらおうたのんでもらってるね。おかあさんは元気でやっています、ハンナとジョージのことを毎日思いながら……。会いたいな。返事、ちょうだいね。ふたりとも元気で。たくさんのキスと愛をこめて。おかあさんより 一九四一年五月 ラーベンスブリュックにて

労働を続けるマルケータ。

マルケータ ハンナ、お誕生日おめでとう。

別の場所に浮かびあがるハンナとジョージ、そしてカレル。

ハンナ (手紙を手に) ありがとう、おかあさん。
カレル ハンナ、お誕生日、おめでとう。

ジョージ おめでとう、ハンナ。
ハンナ ……おかあさん、

史子が出てくると、観客にダビデの星を見せる。

史子 (静かな怒りをこめて) これ、何だと思えますか? この黄色い星。ユダヤ人の印です。ナチスドイツはすべてのユダヤ人にこの印をつけるよう命令したんです、誰が見てもすぐにユダヤ人だとわかるように。

カレル、ジョージ、ハンナが自らダビデの星をつけている。

◆シーン 10.

ナチスの声 「カレル・ブレイデイ、カレル・ブレイデイ、すぐにでてこい！
今すぐにだ！」

ジョージとハンナを奥へ促し、カレルが出てくる。

カレル 今いきますから。少しだけ、少しだけ待ってください。すぐに準備
しますから。

カレル、奥からかばんとコートをつかむとすぐに出てくる。

カレル (ナチスの声に従い、そちらへと向かいながらも舞台奥のふたりに)
おまえたちは出てきちゃダメだ！ ジョージ、ハンナを頼んだよ。

ジョージ・ハンナの声 おとうさん！

カレル、去る。

ジョージ・ハンナ (それぞれに) おとうさん、おとうさん！ おとうさん！

走り去る車の音。

父を追って外へ飛び出していくふたり。

ハンナのかばんを持って、地図を見ながらどこかへ向う

史子。

史子 (ふと立ち止まり) ワイゼンキンド・・・孤児、みなしご——ハンナにはおとうさんもおかあさんもいなかったってこと？ ひとりぼっちでハンナはいつたいてどうしてたんだろう・・・(再び歩き出し、去って行く)

「おとうさん！」「おとうさん！」走り続け、ひたすら父を求めるハンナとジョージ。でも追いつかない。

ハンナ ……。

ジョージ (ハンナを抱きしめる) ……、とうとうふたりきりになっちゃったな……。だいじょうぶ、だいじょうぶだ、ハンナ、ルドビックおじさんがぼくらを迎えに来てくれる。

◆ シーン 11.

そんなふたりに追い打ちをかけるようにナチスの声が。

ナチスの声 (ジョージの言葉をさえぎるように) 「ハンナ・ブレイデイ、ジョージ・ブレイデイ、トジエビーチの移送センターに出頭せよ。」

父・ジョージ そしてとうとう、わたしたち兄妹の番がまわって来た……。

ふたり、それぞれにかばんを持ってでてくると手をつなぐ。ハンナのかばんにはまだ名前も何も書かれていない。かばんを持った人々が『かばんに何をつめようか』が歌いながら、あちこちから集まってくる。

♪ かばんに何をつめようか

かばんに何をつめようか かばんに何をつめようか

鉛筆とノート 絵だって描けるし 手紙も書ける

読みかけの本も忘れずに 話の続きが気になるから

かばんに何をつめようか あなたは何をつめますか

あの日の写真を本にはさむ

あのときのみんな　あのときのわたし
ころころ甘いあめ玉も　いつか誰かとひとつずつ　いつの日か

かばんに何をつめようか　かばんに何をつめようか
古びた人形　わたしのつぶやき　いつも聞いてくれた
お気に入りのタオル忘れずに　汗も涙もふきたいから
かばんに何をつめようか　あなたは何をつめますか

あの日の写真をそっと入れる

あのときのあなた　あのときのわたし

きらきら光るビー玉も　いつか誰かと遊ぼうか　いつの日か

電車に乗り込むジョージとハンナ、そして人々。

かばんを持ち何かをつぶやいている。

詰めこまれた人々、貨車が動き出す。こみあう貨車の中で揺れる人々。そして貨車は収容所につく。

◆シーン12

ナチスの兵士　ようこそ、テレジン収容所に！　ここはみなさんユダヤ人のための場所、ユダヤ人のパラダイス！　ここには仕事もある、幸せに暮らせる家もある、もう心配することは何もない。ようこそ、テレジン収容所に！

帽子を目深にかぶった兵士が笛を吹くと、人々は一列に並ぶ。兵士は人々をひとりずつふたつの方向に選別する。ジョージの番になる。ジョージの行き先を指示する兵士。ジョージと一緒にいこうとするハンナを兵士が止める。

ハンナ　おにいちゃん……（としがみつく）

ジョージ　妹なんです。一緒にいられますか。

兵士がふたりを引き離す。

ハンナ　おにいちゃん、おにいちゃん！（と追いかけてようとする）

ジョージ　ハンナ、心配するな、必ず迎えに行くから。

ハンナ　おにいちゃん、おにいちゃん！

兵士が笛をならすと、ふたりはそれぞれ別の場所に收容される。

◆シーン13.

現代。史子が手紙を読んでいる。

史子 テレジン收容所……、ハンナはテレジンの收容所にいたんだ……。
テレジンにいけば何かわかるかもしれない。

史子がかばんを持って、テレジン收容所を見回すようにして歩いていく。現代と過去が交差する。

史子 (周りを見回しながら) このテレジン收容所がつくられたのは一九四一年……、その日から四年間、とてもたくさん(十四万四千人)のユダヤ人がこの收容所に送られてきた……。十一歳になったばかりのハンナも、ここに連れてこられたのね。今はこんなに静かだけれど、ハンナのいた頃、ここは……。果てしなく続く厳しい労働……。おなかにはペコペコ……。 (ねずみの鳴き声がする) ねずみが走る、ノミやシラミだらけなのに着替える服もない、お風呂にも入れないでどんどん薄汚れて……。くさくなっていくのが自分でもわかる。ここは病気だらけ。病気のせいで、ひもじさの中で、ナチスの暴力で、ここに来た人の四分の一近くはここで死んでいった。怒鳴られ、踏みにじられて、心まで枯れ果てて……。

收容所で眠っているハンナの姿が浮かび上がる。

史子 ハンナ、小さなハンナ、わたしにあなたの何がわかるだろう……。わたしはあなたに何をしてあげられる？ (何もしてあげられない……。) あなたにただ会いたくて、あなたのことが知りたくて、ここまで来てしまったけれど……。どうすればあなたに近づけるの？ 確かにあなたはここにいたはずなのに……。届かない……。あなたに。

しばし立ち尽くす史子。

やがて史子はその場で上着を脱ぐとダビデの星のついたセーターを着て、ハンナと同じ收容者であるエバとなる。

◆シーン14

ナチス兵が、棒で床をならすとユダヤ人が出てくる。ひたすら労働を続けるユダヤ人たち。エバとなった史子も労働に加わる。

♪ゲットーソング

重い足ひきずり

目を伏せ歩くのは

風が強いせいじゃない

冷えたからだ抱き

震える心をかかえ どうすればいいの

晴れた日ばかりじゃないことはわかってるつもりだけど
こんな日があつていいはずはないのに

父ジョージがテレジンでの日々を思い出しながら、テレジン収容所で少年たちがひそかに出していた雑誌ヴェデム19号(1943.4.23)に掲載されたロシアの詩人チュツチェフの詩を朗読する。その間もひたすら配管作業を続けるジョージ。

再びナチス兵が棒で床をならすとユダヤ人たちは自分の寝床へ帰っていく。

が、やがてユダヤ人が闇に紛れて、観客の間をまわり、「生きのびろ」とパンをこっそり配る。
見回りのナチス兵がそれを見つけ追いかける。

◆シーン15

眠っているハンナがうなされている。

ハンナ (うわごとで) おかあさん……、おとうさん……!

エバがやってくるとうなされたハンナを起こす。

エバ ハンナ、ハンナ！ 起きて、ハンナ！

ハンナ (起きて) ……、

エバ 怖い夢を見たのね。

ハンナ ……おかあさんが……おかあさんが！(夢の恐怖が続いている)

エバ (ハンナを抱き寄せると)ハンナ、夢よ、悪い夢なの、だいじょうぶ。

それよりハンナ、喜んで。きょうから外に出られることになったんだって。

ハンナ 外？ 外に出ているの？

エバ もちろん、決められたわずかな時間、収容所の敷地の中だけだけどね。

ハンナ それでもいい。この建物から出られるんですよ。じゃあ、お兄ちゃんを探しに行ける。

エバ (うなずく) さあ、行きましょう、ハンナ。

ハンナ エバ！ ありがとう。

ふたりで急いで外へ出て行く。

◆ シーン 16.

舞台ではジョージが配管作業をしている。

ハンナがジョージを呼ぶ声がある。「ジョージ！ ジョー

ジ！」「ジョージ・ブレイデイはいませんか？」「おにいちゃん！」というハンナの声が何度も聞こえてくる。その

の声に気づくジョージ。ハンナが駆け込んでくる。

ジョージ ハンナ？ ハンナ！

ハンナ おにいちゃん！

ジョージ ハンナ！ 元気だったか？

ハンナ うん、お兄ちゃんこそ…。

ジョージ ごめんよ、迎えにいけなくて。ずっと配管工の見習いをさせられて…。ハンナ、やせたんじゃないか。

ハンナ そんなことないよ。

ジョージ 走って来たのか。

ハンナ うん、お兄ちゃんの部屋に行っても会えなかったから、そこらじゅうを走って探し回ったの。

ジョージ そうか、(かわいくていとおしくて少し吹きだしながら)ハンナ、鼻の頭、汗かいてるぞ。(とそで口で拭こうとする)

ハンナ えー！（と鼻の頭をあわてておさえる）もう、おにいちゃんって
ばー！（と怒りつつ）

ジョージ （笑いながらふと）・・・おまえ、ひとりで大丈夫か？

ハンナ （うなずく）・・・エバもいるし。友だちなのおねえさんみたい。
ジョージ （心配しつつも少しほっとして）そうか。

ハンナ お兄ちゃんは？

ジョージ お兄ちゃんは平気さ。毎日配管の仕事で大忙しさ。

ハンナ 配管ってどんなことするの？

ジョージ （管の一部を見せて）こういう管をつないでいくんだ。

ハンナ （昔の中をのぞいて見たり）

ジョージ 水やガスの通り道をつくるんだ。もれないようにちゃんとき。

ハンナ この中を水やガスが通るの？

ジョージ ああ。

ハンナ ふーん。

ジョージ （ハンナを見つめている）

ハンナ ねえ、お兄ちゃん、ここを出たら、どこへいきたい？

ジョージ え？

ハンナ フリードル先生がね、行きたいところの絵をかきましようって。

ジョージ フリードル先生？

ハンナ わたしたちの絵の先生。

ジョージ ああ、秘密の学校の先生か。

ハンナ そう。ねえ、おにいちゃん、どこへいきたい？

ジョージ うーん、どこかなあ。

ハンナ わたしはねえ、またピクニックへ行きたい！

ジョージ ピクニックか。日曜日になると、家族そろってみんなで行くっ

たよな。

ハンナ 外で食べると、いつもと同じパンが、なんだかおいしくなったよね。

ジョージ 小川にたらいを浮かべて、ふたりで乗ってひっくり返ったことお

ぼえてるか。

ハンナ おぼえてる、おぼえてる。

ジョージ おまえ、川の水飲んで、べそかいてた。

ハンナ お兄ちゃん、揺らすんだもん。（笑う）また行きたいね。

ジョージ 行きたいなあ。

ハンナ また行けるかな、みんなで。

ジョージ いけるさ。

ハンナ おにいちゃん、一緒に行こ！

ジョージ え？

◆ シーン17.

少し離れたところで、エバがハンナたちを待っている。それに気づいて、ハンナが手をふる。エバが口元にゆびをあてて、「シー」というそぶり。辺りを見回しながら、ハンナ、ジョージの手をひっぱってエバと合流し、ほかの収容所の子どもたちと共にスクリーンの前に行くと、みんなで大きな絵を描き始める。

父ジョージ テレジンの収容所では、収容されたおとなたちがナチスに内緒で子どもたちのために秘密の学校を開いてくれたんだ。ユダヤ人の芸術家たちが先生になった。盲目の彫刻家、音楽家、画家——ハンナたちが絵を習っていたフリードル先生は収容所の子どもたちこそ絵を描くことが必要なんだと、かばんに紙とクレヨンをたくさんつめてこの収容所にやってきた、自分のセーターや荷物もあきらめて。収容所の中においても、こうして絵を描いている間だけは、自由に世界を飛び回ることができたんだ。わたしたちは秘密の学校で歌を歌い、おどり、未来を信じようとしていた。

『晴れた日には』を歌い、夢中で絵を描く子どもたち。
スクリーンには子どもたちが描いた明るい美しい世界が
広がっていく。
ハンナと子どもたち、『ムカデさんのうた』を歌い、おど
りだす。

♪ ムカデさんの歌

歩きつづけりや 足がいたむ
足が百本なら どんなにか
泣きたいときも 悲しいときも
ムカデさんのこと かんがえる
ムカデさんにくらべたら
わたしなんて しあわせね

見張りをしていた父ジョージが笛をならし合図する。
みんな大急ぎで逃げるように散っていく。
ひとり残ったエバはダビデの星の着いたセーターを脱ぎ
史子に戻ると、あらためてスクリーンを見る。

史子 (スクリーンに描かれた世界を見て) こんなふうには、ハンナも絵を描
いていたのね。ハンナが描いた絵(しみじみと見つめ)、花が咲いて
る……、ハンナはただ絶望していたわけじゃない、ハンナの心は枯れ
てなんかいなかった。(去る)

◆ シーン 18.

ハンナとジョージがふたり寄り添って、声をひそめて
何かを話している。

ハンナ ……おかあさんやおとうさん、どうしてるだろうね。

ジョージ ここには来てないみたいだな。いろんな人にも聞いてみだし、人
が連れてこられる度に観に行くんだけど……。

ハンナ そう……

父ジョージが出てくる。

父ジョージ なんとかしてでもハンナを守ろう。おとうさんとおかあさんにま
た会える日まで、ぼくがハンナを守るんだ。わたしは本気でそう思っ
ていた。

ジョージ (ハンナに) そうだ、ちょっと待ってて。

父ジョージ 会えるのは週に一度だけ、それでもわたしたちは時間の許す限
り一緒にいた。

父ジョージがハンナに手を振る。ハンナもにこっと笑い、
父ジョージに手を振りかえず。

ジョージ、急いで戻ってくると

ジョージ 誰に手振ってたの？

ハンナ 秘密！ お兄ちゃんには言わない。(と笑う)

ジョージ ハンナ！

ハンナ 誰かなんて知らない、むこうから手を振ってきたから、お兄ちゃん
の友達かなと思って。

ジョージ (周りを見て) まったくどのどいつだ、油断もすきもないなあ。
(ハンナに) ここは男の子の部屋ばかりだから、気をつけるよ。男
の子なんか好きになっちゃだめだぞ。おまえにはまだ早いんだから、
いいな。

ハンナ はい。

史子が出てくる。

史子 ハンナにお兄さんがいた。テレビジョン収容所のリストの中に、わたしは
ハンナの名前と、(父ジョージに) あなたの名前を見つけたのです。ハ
ンナ・ブレイディの名前のそばにあるジョージ・ブレイディの名前を！
ハンナにお兄さんがいたなんて、思いもかけないことでした。

父ジョージにハンナの描いた絵を見せる史子。

その絵をじつと見つめる父ジョージ。

ジョージ (持ってきた写真を見せて) いいものを見せてやるよ。ほら、こ

れ、みんなで撮った写真。

ハンナ あ・・・おとうさん、おかあさん・・・お兄ちゃんまだちっちゃい

(笑う)

ジョージ ああ、かわいかったな、ハンナもおれも。

家族の写真を見ているジョージとハンナ。

ハンナ ねえ、おにいちゃん、おなか減ってるでしょ。

ジョージ おなかへってないやつなんてここにはいないよ。

ハンナ (ポケットからパンのかけらを出す) これ、食べて。

ジョージ なんで？ ハンナ、自分で食べるよ。

ハンナ だって、おにいちゃん、配管工の仕事たいへんだし、わたしより大
きいからもっとおなかすくに決まってるし、あげる！ また来るね！

(と走って帰っていく)

ジョージ ハンナ、ハンナ！ (手の中のパンのかけらを見る) ハンナ…。

ジョージ、そのパンをじつとみつめると、やがて食べる。
そして、ふたたび配管の仕事を始める。

父ジョージ テレジンの収容所には次々と人が連れてこられた。人が増えれば、水道やトイレは絶対に必要になる。配管工にさせられたわたしは毎日大忙しでへとへとだった。ノミやしらみだらけ、まともなものも食べられない収容所では、チフスやポリオ、いろんな病気で次々と人が死んでいった。ハンナも高い熱を出したことがある。でもそばにいて看病してやることはできない。ハンナに何かあつたらどうしよう、そう思うと夜も眠れなかった。熱が下がったときはどんなにほつとしたか。

いつの頃からか、テレジンから人が貨車につめこまれて東へ送られていくようになった。やがてこんな噂が流れ出した。「行きつく先は『死の収容所』、そこでたくさんの人が殺されている。」

名前が張り出されると、二日以内に貨車に乗らなければならない。いつ自分の名前が張り出されるのか、誰もが毎日おびえていた。そして一九四四年九月、張り出された二十人の名前の中にわたし、ジョージ・ブレイデイの名前があった。ハンナとふたり、テレジンへ来てからもう二年以上がたっていた。

◆ シーン 19.

ジョージ、配管の仕事をやめると、かばんを準備する。

ハンナがやってくる。

ハンナ ……おにいちゃん。

ジョージ こんなこと、いつまでも続くはずがない。もう少しの辛抱だ、ハンナ、がんばろう、な。

ハンナ ……おにいちゃん

ジョージ おにいちゃんがいなくなっても、ちゃんと食べて、できるだけ外の新鮮な空気をすうんだよ。おとうさんとおかあさんに会うときまで元気でいなくちゃ。また家族みんなで暮らすんだから。(パンのかけらをハンナの手に握らせる) これ、全部食べるんだぞ。

ハンナ おにいちゃん……

合図の笛の音。

ジョージ 集合の合図だ、行かなきゃ。

ハンナ お兄ちゃん待ってて！！ 必ず戻ってくるから、待っててよ。

ハンナ走り去る。

再び合図の笛、ジョージ、ハンナの方を気にしているが、やがて笛のなる方へと去っていく。

ハンナ、戻ってくる。

ハンナ おにいちゃん、おにいちゃん！

ひとり立ち尽くすハンナ。

父ジョージ ハンナの名前が張り出されたのは、そのすぐひと月あとだった。

ハンナはおそれるよりもむしろわたしに会えるとても喜んでたそう
だ。

ハンナ (かばんを持って出てくるとエバを見つけ) エバ。

エバ (同じくかばんを持って出てくると) ハンナ。

ハンナ エバ、お願い、手伝って。お兄ちゃんに会うんだもん、きちんときれいにしていきたいの。ちゃんと元気にしてたつてとこ、見せなきゃ。

エバ ……そうね、じゃあ、顔を拭いて、髪をきれいにしようか。

ハンナ うん(うなづく)。

エバは、ハンナの髪をきれいにとかす。その間、ハンナは自分で顔をそっと拭く。髪をとかすと、ハンナを見てうなづくエバ。

エバ 仕上げはこうして(と、ハンナのほっぺを両手で両方に軽く引っ張る)
ハンナ エバ、変な顔になっちゃうよ。

エバ (両手で引っ張って)こうしてると変な顔だけど、手を放すと、ほら、ほっぺが赤くなってかわいくなった。

ハンナ ほんと？ ありがとう。エバがいてくれてほんとによかった。

エバ ……ずっと一緒よ。

父ジョージ ハンナもわたしたちと同じように貨車につめこまれてアウシ

ユビッツに向かったのだろうか。

かばんを持った人々があちこちから出てくる。かばんに荷物をつめて、立ち上がるハンナとエバ。人々と共に貨車に乗りこむふたり。父ジョージも一緒に乗り込むと、貨車の扉が閉められ、貨車は動き出し、時折大きく揺れる。

父ジョージ 扉が閉められると、貨車の中は暗くてむっとして、息をするのも苦しかった。人いきれでどんどん暑くなっていく、人が多すぎて身動きもできない、ずっと同じ姿勢でからだが痛くなってくる。腹が減る、のどがからからだ……。何度も気が遠くなった。出発してどれぐらいたっただろう。

キーという、貨車が止まる音。

貨車の扉が開けられる。番犬のうなり声、ほえたてる声。

兵士が立っている。

スクリーンにはアウシユビッツの映像。

兵士 外へ出ろ！ さっさとするんだ。

ハンナとエバ、そして人々は貨車から降りると、兵士に追い立てられる。

父ジョージ たどりついたのは絶滅收容所アウシユビッツ、そこは人を殺すための場所だった。死体を燃やすひどい匂いがしていた。ここでは働けないものはみんなガス室で殺される。……右にはガス室があったんだ。右へ行かされた友達も死んだ、右にいった人たちはみんな殺された。

兵士が笛をならすと人々は横一列に並び、持っているかばんの中身をすべて出す。再び笛をならすと人々は一列に並ぶ。

兵士 (つぎつぎと指さして) おまえは左、右、右、おまえは左！

ハンナとエバが並んでいる。エバは左へ行かされる。

ハンナ ……エバ

エバ (あっちで) 待ってるから。(と左に去る)

兵士はハンナをじっと見ていたがやがて

兵士 (ハンナに) おまえは右だ。

ハンナはひとり右へと向かう。

父ジョージ、ハンナが右へいこうとするのを見て思わず、

父ジョージ ハンナ、ダメだ、(そっちに行っちゃダメだ!) ハンナ!

父ジョージのその声に一瞬振り向いたように見えるハンナ、ゆっくりとまた歩き出す。右へと消えるハンナ。
重い鉄の扉が閉まる音がする。

父ジョージ 男の子を好きになっちゃダメだなんて、なんであんなこと言ったんだろう……。ハンナがアウシュビッツで殺されたと聞いたのは、何ヶ月もたってからだった。まだ十三歳でハンナは……。おとうさんもおかあさんも、もうずっと前にアウシュビッツで殺されていた。あのとき、左へ行くようにといわれたわたしは、髪の毛を全部そられ、腕に番号を刺青された。B11498、これがアウシュビッツでのわたしの番号だ。(その瞬間がよみがえる) きざまれた番号に血がにじんで……。痛くて……。気がつくとき素っ裸にされていた。はだかでも丸坊主、腕には数字だけが刻まれている。わかるかい、その情けない、心もとない気持ち、自分が人間じゃなくなったみたいだった。わたしはもうジョージ・ブレイデイでもなかった、ただ番号で呼ばれる物にされてしまったんだ(腕をまくる) B11498。そして、ひとりだけ生き残った。

◆ シーン 20

♪ ハンナの歌

うたいたい あのを歌を
晴れた空 みあげたい
走りたい おもいきり
ともだちと 笑いたい

いつか時を越えて あなたに 会えるのならば
どんなことして あそぼうか 話そうか

とどけよう この歌を
うけとめて この想い
その心 ほどきたい
ほほえみよ ひろがって

いつか時を越えて 誰かが 気づいてくれる
わたしの涙のその先にあるもの

人々は歌いながら、有刺鉄線はずして行く。
史子が出てくる。ハンナがカバンを持って出てくる。史子
にかばんを託すハンナ。史子がかばんを確かに受け取ると
ハンナは去る。

人々は歌いながら自分のかばんに荷物をつめている。
父ジョージのもとにララ・ハンナがやってくる。ララ・ハ
ンナは父ジョージの腕にある番号をそっと手で包む。
そんなふたりの様子をじっと見つめる史子。

人々が歌う中、史子はハンナのかばんを持って人々の中を
歩いていく、そして更なる人々の中へ。それを見送る父ジ
ョージとララ・ハンナ、そしてマルケータとジョージ、人々。
史子以外の人々がゆっくりと消えていく。
歩き続ける史子。

歌声だけが響いている。

了

監修／石岡史子（NPO法人ホロコースト教育資料センター）

『ハンナのかばん』（ポプラ社刊）カレン・レビン著／石岡史子訳を参考図書に、

石岡史子さんご本人にお話をうかがって、劇団銅鑼でのワークショップを経ながら書いた脚本です。